

附属特別支援学校の中学部生徒を対象にした包括的性教育の試み ～指導内容や指導形態をさぐる～

研究代表者：和歌山大学教育学部 林 修

共同研究者：辻本佐和美 入學遼治 田村さち 三木理恵子 清水祐野
山路公美子 川崎貴人 猿棒 亜矢

1. はじめに

本校中学部では、平成 24 年度以降、学期ごとに 1 回程度の時間を特設し、男女別や発達段階別のグループにて「体の学習」(性教育)を行ってきた。さらに、令和元年度からは、異性の身体の変化や考え方の違いについて気づきやすいように、また、お互いのことを尊重し、思いやる気持ちにつなげていくことを大切にしたいと考え、男女共習での 2 つのグループに分けた指導形態を新たに用いて、実践を行った。こうした取り組みの中で、生徒の実態に即した指導内容や指導形態のあり方を実践的に研究しているところである。

2. 単元を設定するにあたっての包括的性教育の考え方

本校の子どもたちは、発達段階や障害特性等の違いから、友人関係の中で性に関する知識や対応の仕方等を自然に学び取っていくということは難しく、目の前にある情報がすべてだと捉えてしまうような実態がある。それだけに、「性」についても正しい知識を理解し、考え、学んでいく機会が求められる。そのためには、まず教師側が正しく「性」を捉え、

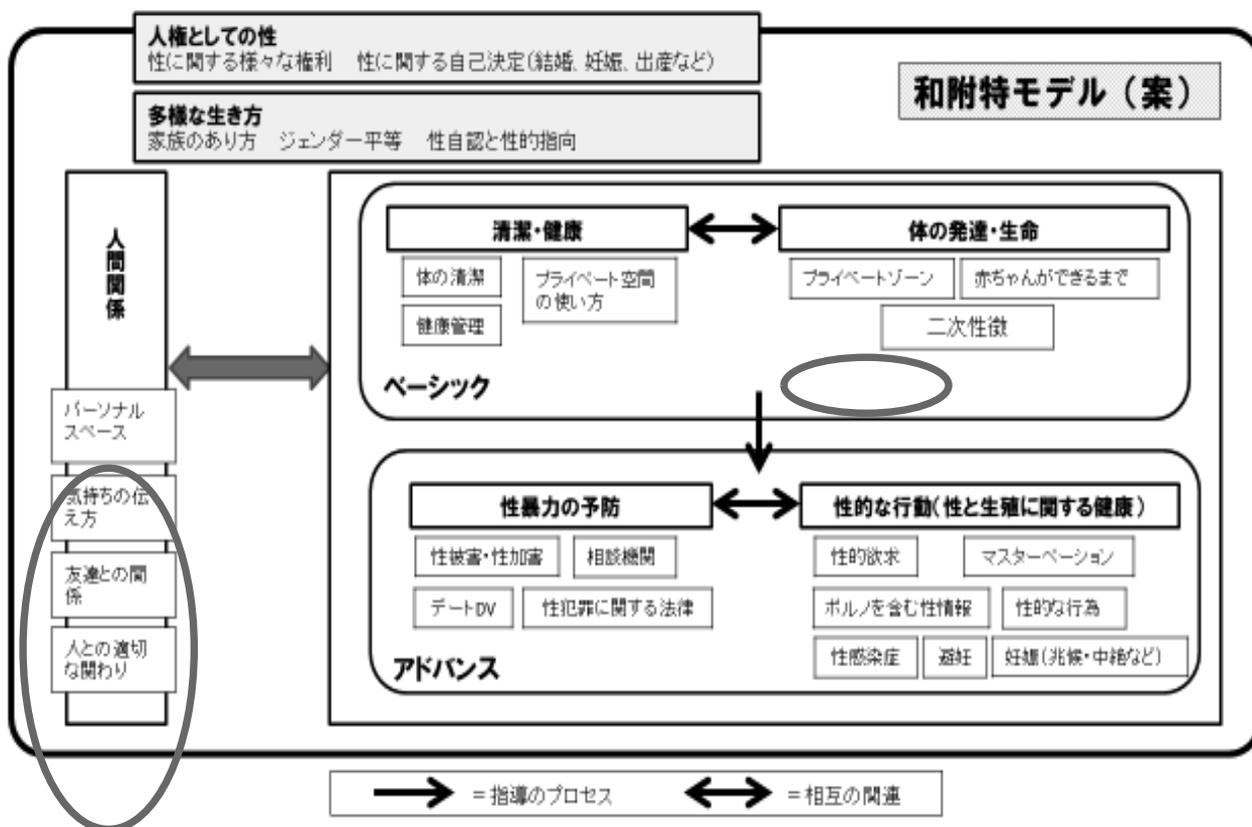


図 1 仮説したセクシュアリティ教育の和附特モデル

子どもたちに何をどのように教えるのかを整理する必要がある。現在中学部では、本校の研究（セクシュアリティ教育グループ）で令和元年に作成したセクシュアリティ教育和附特モデル（図 1）を使用し、個人の特性に応じてそれぞれの学習内容を確かに学ぶことができるような授業づくりを研究しているところである。

この和附特モデルの特徴は、『人権としての性』『多様な生き方』をベースとおさえたいうえで、『清潔・健康』『体の発達・生命』<ベーシック>、『性暴力の予防』『性的な行動（性と生殖に関する健康）』<アドバンス>、及び、これらと関わる『人間関係』について学ぶことを大切にしているところである。こうした考え方に基づき、今回は、『体の発達・生命』の単元を設定し、実践した。

本稿では、この学習における子どもの学びについて報告する。

3. 包括的性教育としての実践をめざして

①指導内容の仮説

中学部の生徒たちは、休憩時間に友だち同士で、あるいは教師も交えてカードゲームをしたり、興味のあることについて話をしたりと、人との関わりを楽しむことができている。一方で、家族に甘えるかのように教師や友だちにべったりくっついたり、男女かまわず体に触れたりしてしまうこともある。なかには、友だちに関わりたくて、近くに行っていきなり「わっ」と驚かせてみたり、少し仲良くなった友だちのことが気になり、後をつけて家まで行ってしまったりというケースもあった。

対象としたグループは全員、地域の小学校を卒業し、中学部から本校に入学してきた生徒 7 名である。この生徒たちは、これまでに本校で性の学習を経験しているが、「人との適切な距離とかかわり方」については、本来、日常生活での人との関わりの中かで自然と身につけていくものと考えられるため、授業で学習した経験がほとんどない。しかし、本グループの生徒たちは発達段階や障害特性等から、仲良くしたくてもどうしたらよいかかわからなかったり、相手の気持ちを考えて行動したりすることが難しいといった特徴がある。こうした実態を受け、本単元では、自分と相手との適切な距離や、人によってももの見方、考え方が違うことに気づき、相手の気持ちをふまえて対応の仕方を考えたり発言したりできるようにしてほしいという願いに基づいて単元を構想した。

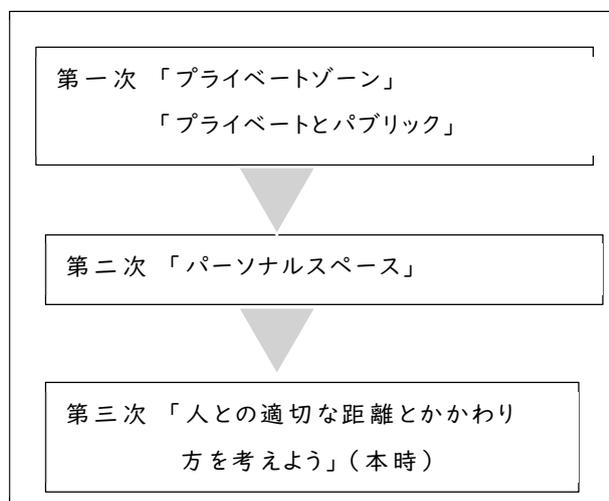


図 2 単元計画

学習集団については、昨年より男女共習での性の授業に取り組んでいる。実際の指導にあたっては、第一次では、「プライベートゾーン」の場所や約束（見せない・触らせない、見ない・触らない）を確認し、プライベートな場所とパブリックな場所の違い、さらにマナーやルール、法律（守らないと犯罪になる）について話し合った。

第二次では、「パーソナルスペース」を“人との距離を虹色に表したオリジナル教材”（図 3）を使って確認し、人によって「パーソナルスペース」の広さが違うことを知り、

表1 4つの場面設定で出た意見

	設定した場面	授業中に出た意見	こんな時どうする？
A	知らない人に手をつながれた	「びっくりした」「こわい」「触らんといて」	「防犯ブザー」 「(やめて) と叫ぶ」
B	友達にいきなり手をつながれた	「いや」「度を越えている」「タイミングを考えないとなあ」「ソーシャルディスタンスを守っていない」	「(つないでよいか) 聞かないといけない」「ありがとう、でも恥ずかしいからと言う。」
C	後ろから抱きつかれた	「くっつきすぎや」「ドキッとなるわなあ」「小学生ならセーフやなあ」	「肩をたたく」「横から見る」「名前を呼ぶ」
D	気になったからついて行った	「ストーカー」 「怪しいから警察に言おうか」	「家を教えてくださいという」

えられるようにしたことと、第一次での既習内容とを対応させながら話し合ったことによるものであろう。なぜなら、吹き出しによって視覚化させたことで、状況の把握と登場人物の気持ちを確認しながら話し合えたこと、さらに、その発言の内容を「プライベートゾーン」や「パーソナルスペース」など、社会生活の中でのマナーやルール、法律などに関連付けたことによって、第三者の視点から状況や発言内容を捉えることができるようになったからではないかと考えられる。

これらのことから、本実践において、子どもたちは場面における人物の気持ちに同化し、自分のこととして捉えることができるとともに、社会生活の中でのマナーやルールなどとの関係を考えることで、状況を客観的に捉えることができるようになったものと考えられた。こうした視点の広がり、それまでの自分の行動の問題点を客観的に浮き彫りにして、自らでその問題点を解決していこうとする姿勢につながっていくものと信じている。

5. まとめ

今回行った実践では、話し合いの結果、今まで自分が行っていた行動が A～D の場面に当てはまるということを自覚し、「自分が当てはまると思う人は？」という質問に対して苦笑いをしながら、手を挙げる生徒が何人かいた。これは、先生のロールプレイングに続いて、生徒同士で役割を決め、実際にやり取りしたことで、生徒が登場人物になりきって、相手の気持ちなどを体感することができたことによるものと考えられた。

さらに、マナーやルールなど、社会生活における規範的内容と照らし合わせることで、自らの行動を客観的に把握することが可能となったものと考えられた。

今後も、相手の気持ちを考え、適度な距離を保った上で人と関わるができるよう引き続き実践していきたい。

文献

UNESCO (編) 浅井春夫・良香織・田代美江子・渡辺大輔 (訳) (2017) 国際セクシュアリティ教育ガイダンスー教育・福祉・医療・保健現場で生かすために、明石書店。